
水中花

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水中花

【Nコード】

N9620M

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

健は奈々に学校の前の湖の中の花を手に入れれば願いが適うと言われた。それでその花を取りに湖の中に入ると。綺麗な恋愛ものが書きたくて書きました。

第一章

水中花

山中健はある日坂本奈々にこんなことを言われた。

「湖の中にお花があるんだ」

「はい、知りませんでした?」

「初耳だけれど」

まずはこう返す健だった。髪は少し茶色がかっていてそれを分けている。顔は痩せていて素朴な感じがする。身体も痩せていて背はあまり高くない。目が細い。その光は優しい。その彼がこう返していた。

「そんなことって」

「そうですねですか」

「ええと、湖っていうと」

「はい、学校に行く前のあそこの湖です」

「そこだよね」

健もそれを聞いて頷く。

「あの湖に」

「それで山中さん」

奈々は健に対して言ってきた。

「こんな話も知ってます?」

「こんな話って?」

「その湖の中にあるお花を手に入れるとです」

「うん」

「願いが適うんですよ」

「こう言ってきたのである。」

「自分自身の願いがです」

「そうなんだ」

「やっぱり知りませんでした?」

「うん、御免」

申し訳なさそうに健に返した。

「今はじめて聞いたから」

「そうなんですか」

「そんな話あつたんだ」

今更といった感じの言葉になっていた。

「そうだったんだ」

「それですね」

そんな健に対してさらに話してきた奈々だった。

「その花は今の季節に咲くんですよ」

「しかも今に」

「はい、そうなんです」

こう健に話すのだった。

「今なんです」

「今って？」

「今っていうと」

「それでその花を手に入れたら」

奈々の話はさらに続く。

「願いが適いますから」

「願いがなんだね」

「はい、どんな願いもなんですよ」

「凄いな。じゃあ僕がさ」

健は奈々のその話を聞きながら問い返した。

「若しその花を手に入れたら」

「はい、どんな願いも適います」

「そうなんだ。それだったら」

「それだったら？」

「お花手に入れてみますか？」

奈々は何故かこんな話の展開をしてきたのだった。健はそれを感じ取ったが彼女はそれに構わずに彼にさらに言ってきたのである。

「今度の日曜にでも」

「えっ、日曜？」

「山中君泳げますよね」

「うん、まあ」

それにも頷く彼だった。

「そうだけれど」

「じゃあいいですよ。今度の日曜に」

「湖の中に入ってそのお花を手に入れる」

「してみますよね」

「そうだね。あの湖は確か」

健はここでその湖について考えた。水の中だ。安全のことを考えたのである。

「管理人さんいたよね」

「はい、います」

「けれど危ないのは確かだよ」

そしてこんなことも言うのだった。

「危ないから。それだったら誰かと一緒に行こうかな」

「あっ、それは大丈夫です」

しかしだった。何故か奈々はここでこんなことを言ってきた。

第二章

「それは大丈夫ですから」

「大丈夫って？」

「一人で大丈夫ですから」

「けれど若し何かあったら」

危ないだろうと言おうとする。だが奈々はその前に言ってきたのだった。

「それはありません」

「だから何でそれはないの？」

「だって私が」

「私が？坂本が？」

「あつ、いえ」

彼の言葉を聞いてだ。はっと気付いた顔になって言葉を止めた。そうしてそのうえで一旦自分の左手を口に当ててだ。それから話すのだった。

「何でもないです」

「何でもないんだ」

「はい、ないです」

こう言うのである。

「気にしないで下さい」

「わかったよ。それじゃあ一人で？」

「はい、一人で来て下さい」

また彼に話す。

「湖に。そして中にある水中花を」

「取るんだ」

「そうです。水中花をです」

「わかったよ。じゃあ今度の日曜一人で湖に行くから」

「それで御願います」

「けれど危くないんだ」

健にはそれがどうしてもわからなかった。だが奈々に押し切られてしまった。そういう形になってしまったのである。彼は押しに弱い。

それにだ。奈々の顔を見るとだ。そうなってしまうものがあつた。二重の落ち着いた顔で眉は薄く形がいい。細面であり唇は薄いピンク色であり横に小さい。黒く背中の中半ばまである髪である。背は小柄と言つていい。だが胸は大きくスタイルはかなりのものである。その彼女の整つた笑顔を見るとだ。つつい押しされてしまう。完全に奈々のペースで話は進みこの時はそれで終わったのだつた。

そしてその下校の時だ。彼はその湖を見ながら呟いた。

「日曜にここなんだ」

湖は澄んでいて静かなものだ。岸边にはボートがあり蓮も見える。そうした静かな湖を見ながらだ。そのうえでその日曜のことを考えていたのだ。

その日曜だ。彼は湖の岸边に来た。服は学生服である。そしてその学校の鞆を持って来たのである。

彼に管理人のおじさんが話し掛けてきた。この湖のある土地一帯の所有者でもある。その人が声を掛けてきたのである。

「なあ兄ちゃん」

「はい？」

「ボートかい？それとも泳ぐのかい？」

「泳ぎます」

素直に答える健だつた。

「今から」

「そうか、泳ぐのかい」

「駄目ですか？」

「いや、いいよ」

微笑んでそれはいいというのだつた。

「じゃあ料金ね」

「お金ですか」

「三百円な」

それだけだというのだ。

「ボートだったら五百円だけれどな」

「三百円ですか」

「うん、それで泳ぐ前に準備体操は忘れないようにな」

「はい、わかってます」

湖の周りは緑の草が生えている。所々水草が生えてもいる。見れば今湖のところにいるのは彼と管理人だけだ。他には誰もいない。

その静かなプールを見ながらだ。彼はまた言った。

「それにしても」

「どうしたんだい？」

「いえ、僕達だけなんですな」

今ここにいるのは、というのだ。

第三章

「だから静かなんですか」

「いや、さつき一人いたけれどね」

「一人ですか？」

「あつ、違ったな」

しかしだった。だがここで管理人はふと思い出した様に言った。

「違った。あんただけだよ」

「僕だけですか」

「そう、あんただけだよ」

急に笑顔になって彼に話すのだった。

「あんただけだよ、ここにいるのは」

「そうですか。僕だけですか」

「そう、あんただけ」

管理人は話しながら水草が生い茂っている場所を見ていた。まるでそこに何かがあるようにだ。見ながらそのうえで話をするのだった。

「それじゃあ。泳ぐんだね」

「はい、そうです」

「うん、じゃあ見つけるんだな」

管理人の言葉は最後は小声だった。だから健には今は聞こえなかった。彼は気付かないまま着替えて準備体操をした。そして湖の中に入った。湖はまだ朝の世界の中に入り朝もやがまだあった。その湖の中に入って泳ぎはじめたのである。

「さて、と」

湖の中に入り泳ぎはじめる。そして潜ってみる。すると。

何かが先に見えた。それを見てすぐに察した。

「あれかな」

その小さく赤いものを見てそれが花だと思った。そうしてそこに

向かう。

そしてそこに向かいあらためて潜る。すると。

「えっ!?!」

健はそこにあつたものを見て思わず声をあげた。花だけではなかつた。

「ええと、何で!?!」

思わずまずは顔をあげて水面から出た。そうしてだ。

「何でここにいるの?」

「待っていたの」

奈々だった。そこに彼女がいたのだ。赤いビキニの彼女がいた。

プロポーシヨンはかなりのものだがそれは今の彼には全く見えなかつた。

「さつきから」

「あの、さつきからって」

「だって。こう言わないと」

奈々も水面上がっていた。そうしてそのうえで二人で向かい合っている。湖の中で向かい合っているのである。

「来てくれなかつたし二人になれなかつたし」

「来てくれた。二人で」

「お花の話は本当よ」

奈々の顔が赤らんできていた。

「それはね」

「その見つけて御願ひすれば願ひが適うつていう」

「ええ。けれど願つたのは私だったの」

「私?」

「そう、私」

彼女自身だという。こう彼に話すのである。

「私が御願ひしたの。山中君とのこと」

「僕と坂本さんのことを」

「そう、一緒になれるように」

そうだといいのだった。

「二人一緒になれるように」

「二人でって」

健は話がよくわからない。それはどうしてもなのだった。

「一体何を」

「ええと」

奈々は彼が気付かないことに内心業を煮やしてきた。それでまずは周りを見回した。そうして誰もいないことを確かめてだ。そのうえで言うのだった。

「好きだから」

「好きって？」

「だから山中君のことが好きなの」

青い湖の中で顔を真っ赤にさせての言葉だ。

「山中君のことが好きなの。誰よりも」

「僕のことか」

「そう、だから一緒にいたい」

告白だった。これ以上はないまで見事な。

第四章

「一緒にいたい。駄目、それは」

「じゃあそれを適えたくてお花に願いごとをして」

「それで僕も読んで」

「そうなの、だからだったの」

「わかったよ」

ここで微笑んで頷いた健だった。

「そういうことだったんだね」

「いいの？それで」

「ここまで来て嫌だなんて言う人はいないと思うよ」

まずはこう返す健だった。

「僕でよかつたら御願いするよ」

「そう言ってくれるの」

「僕もね」

そして彼も言うのだった。

「あれだよ。そこまで想われたら」

「想われたら」

「そう、応えずにいられないじゃない。好きになってくれる人を好きになるのも当たり前じゃない」

「じゃあ」

「一緒にいよう」

健からも言った。

「これからもね」

「有り難う、それじゃあ」

「まずは出よう」

健はまた言ってきた。

「それでね。着替えてね」

「着替えて。どうするの？」

「デートしよう」

「こう言うのだった。」

「ここで二人で遊ぶのもいいけれど」

「デートなのね」

「いいかな、それで」

健も自然に顔を赤らめさせていた。そのうえでの言葉だった。

「それでね」

「そう。だったら」

「行こう、今からね」

「そうね。はじめてのデートだけれど」

奈々はかなり焦りだしていた。はじめてのデートということになって急にそうなりだしたのである。そうしてそのうえで言うのであった。

「一体何処に」

「喫茶店とか。映画館とかはどうかな」

「そうね。じゃあ駅前に出てね」

「どっちかに行こう」

「それが両方ね」

「そうだね。二人でね」

二人で微笑み合いながら話しそのうえで今は湖を出る。その湖の中では花が一輪咲いている。まるで二人を温かく見守る様に咲いていた。

水中花 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9620m/>

水中花

2010年10月8日13時44分発行